

## 「蘭書」発見記補遺

安江 明夫

Abstract : In the Edo era, Ransho or Dutch books played a vital role for the Western Learning during the Tokugawa Shogunate policy of seclusion, but lost their significance after the Meiji Restoration.

The Ransho collection of the National Diet Library are mainly materials transferred from the Tokyo Kaisei School (predecessor of the University of Tokyo) to the Tokyo Shojakukan (predecessor of the National Diet Library) in 1876. It was, however, forgotten for years until the Library's young staff discovered it in 1953.

This discovery of the Ransho collection was epoch-making in moving the new era to the study of Dutch Learning and Western Learning in Japan, but there remained one question in this regard. The collection numbered more than 6,000 vols. when transferred to the Tokyo Shojakukan in 1876 while, when discovered in 1953, it contained only about 3,630 vols. What has happened to the rest of the collection is a mystery up to the present.

The article traces the discovery of the Ransho collection and challenges the mystery of the lost Ransho.

## 1. 「蘭書」の発見

国立国会図書館（以下、「国会図書館」）ホームページの電子展示会「江戸時代の日蘭交流」中に「江戸幕府旧蔵の蘭書」について以下の説明がある。

「国立国会図書館には、蕃書調所、開成所等が所蔵していた洋書が約 3,600 冊伝わっており、そのほとんどが蘭書である。これらは明治 9 年、東京書籍館時代に東京開成学校（現在の東京大学）から移管されたものを主とするが、（中略）閲覧に供されることもなく忘れられた存在となっていた。戦後、上野図書館（現・国際子ども図書館）の倉庫から見出され、江戸時代の蘭学受容を示す貴重な資料であることが確認され、学界にも衝撃を与えた。」<sup>1</sup>

本稿論題中、括弧付きで記す「蘭書」はこの約 3,600 冊（発見当時は 3,630 冊）のコレクションを指す。

戦後の「蘭書」発見については、発見者の朝倉治彦・石山洋（いずれも国会図書館職員＝当時）による仔細な報告「蕃書調所旧蔵蘭書割記」（1954 年）<sup>2</sup> がある。その書出しは「つまり、感染が話の発端です。ここ一兩年の間に、中央、地方で、開港・洋学・幕末関係の催し物、企画が活発に行われ、多くの資料・知識に、我々は接する機会を得て、改めて考えてみた事でした。」<sup>3</sup> である。当時、洋学・幕末への社会的関心に応える機運が国会図書館内にもあり、一般考査部編『幕末和蘭留学生関係資料目録』（1953 年 3 月刊）、小林花子「富士川游博士旧蔵幕末蘭方医手簡」<sup>4</sup> 及び「上野図書館所蔵洋学関係文献目録（1）」<sup>5</sup>（1954 年刊）等をその成果として示しうる。そうした機運を背景に「蘭書」が発見された。

当時、重複本、利用提供に値しない図書類を収蔵していた倉庫に江戸時代の蘭書が含まれていること、その一部に旧蔵者印が見られ

1 国会図書館電子展示会「江戸時代の日蘭交流」>「コラム 江戸幕府旧蔵の蘭書」[http://www.ndl.go.jp/nichiran/s1/s1\\_3.html](http://www.ndl.go.jp/nichiran/s1/s1_3.html).

2 『上野図書館紀要』1, 1954, pp.1-45.

3 前掲注 2, p.1.

4 前掲注 2, pp.46-53.

5 前掲注 2, pp.54-63.

ることは、国会図書館職員の間で幾らか知られていた。それに魅かれたのが書誌研究者で蔵書印等に造詣の深い朝倉で、彼は地理学専攻で外国語に堪能な石山を誘って蘭書探索に取り組んだ。と言っても正規の業務ではない。仕事外であり、作業は勤務のない土曜日午後と日曜日に限られた。「夏は本当に暑くてむっとするようなところで、冬になればそれこそガタガタ震えながら外套を着たまま」「埃がものすごいもんですから、埃だらけでやっておりました。」<sup>6</sup> そんな苦労を続け、しかし一方、おそらくは稀有の発見に胸をときめかせながら、3,630冊の「蘭書」を抜き出した。昭和28(1953)年の夏から冬にかけてのことである。

それまで、江戸幕府旧蔵蘭書のまとまった収蔵で知られたのは静岡県立中央図書館葵文庫のみである。同文庫は、幕末に江戸城から移入等の蘭書827冊、英書370冊、仏書1,250冊、その他を合わせて2,547冊を所蔵している。国会図書館で発見された「蘭書」<sup>7</sup>の殆どは蘭語図書で(つまり英書、仏書等は少なく)、それは葵文庫蔵蘭書を数量的に大幅に超える。しかも国会図書館「蘭書」には江戸幕府最大の翻訳事業『厚生新編』に使用されたノエル・ショメル編『日用百科事典』蘭語原本(口絵26、27)、箕作阮甫・小関三英らの訳業痕跡を残すヨハン・ヒュブネル著『地理学』(口絵22～24)、蕃社の獄で幕府没収となった高橋景保旧蔵本(寄贈者シーボルトの自署本、チュケイ『地理書』など)(口絵16～21)等が含まれる。驚くべき大発見であった。

その報告記が先に書出しを引用した「蕃書調所旧蔵蘭書割記」である。

次いで朝倉・石山らは、報告記刊行翌月の5月25日、上野図書館(国会図書館支部図書館＝当時)で発見した「蘭書」約500点<sup>8</sup>の内見会を催した。展示蘭書には前述の『日用百科事典』、『地理学』、高橋景保旧蔵本や、「蘭書」中最古書のアブラハム・グラーフ

6 「蘭学資料研究会発足の思い出」『参考書誌研究』38, 1990, pp.6-7.

7 国会図書館「蘭書」の殆どは蘭語図書だが、少数の蘭語以外の洋書を含む。

8 石山洋、朝倉治彦「上野図書館所蔵蘭書目録(I)」『科学史研究』32, 1954, p.38.

『天文学』（1659年刊）等が含まれていたであろう。出席者には朝倉・石山による前述「蕃書調所旧蔵蘭書劄記」（抜刷り）が配布された。

この内見会には板沢武雄、緒方富雄、沼田次郎等の蘭学・洋学関係者、大久保利謙、有馬成甫、矢島祐利、金井圓等の歴史研究者約50名が出席した。錚々たる顔ぶれである。そして新発見「蘭書」の展示は、彼らを驚愕させた。見学者の興奮の様子は内見後に上野図書館館長室に出席者達が集ったこと、そこで即時に蘭書研究会発足を決めたことからもうかがい知れる。

さて、5月25日内見会の折に発足を約した研究会は、「蘭学資料研究会」の名称で同年7月13日に正式に発足した。この発足会も上野図書館館長室で行われている。同研究会の事務局は上野図書館内に置かれ、石山、桑原伸介（上野図書館参考課勤務＝当時）らの国会図書館職員が協力した。

以後、蘭学資料研究会は、蘭学・洋学研究の分野で広範囲の活動を展開し、多くの優れた成果を生み出した。同研究会の活動としては、全国各地の残存蘭書調査及び蘭学者調査、研究会開催、展示会「洋学ことはじめ展」の開催、オランダでの日蘭シンポジウム開催などがある。また印刷された成果として『蘭学資料研究会報告』第1号（1955年2月）～第316号（1977年3月）、『江戸幕府旧蔵洋書目録』（1957年刊）がある。同研究会の活動が日本英学史研究会（昭和39（1964）年創設）、日蘭学会（昭和50（1975）年創設）、洋学史研究会（昭和59（1984）年創設）、洋学史学会（平成2（1990）年創設）等の発足を促し、あるいはそれらに継承されたことも注目される。『江戸幕府旧蔵洋書目録』を拡充した日蘭学会編『江戸幕府旧蔵蘭書総合目録』（1980年刊）がその一例である。蘭学資料研究会は日本の蘭学・洋学研究のバックボーンとなった。これら学会・研究会活動の起動力となりかつ礎となったのが、発見された国会図書館所蔵「蘭書」である。図書館の一コレクションの発見がこれほど直接的に学術研究に寄与した例は、日本では他に類がないだろう。朝倉・石山による「蘭書」発見の意義は、歴史遺産的にも学術的にも極めて大きい。発見当時、彼らが20代の若い司

書だったことも付け加えておきたい。昭和 28 (1953) 年と言えば国会図書館は館創設 5 年目。「蘭書」発見の記録から、職員達の若々しい意欲とエネルギーが伝わってくる。

## 2. 「蘭書」の由来

ところで、この「蘭書」はどのような経緯で国会図書館蔵書となったのか。

発見当時、それは不明だった様子である。あるいは少なくとも、正確な理解は得られていなかった。

その点は、「蘭書」発見から 10 年後の『国立国会図書館月報』(以下、『月報』) 掲載「当館所蔵特殊コレクション紹介 (13) 江戸幕府旧蔵蘭学資料」<sup>9</sup> の以下の説明からうかがえる。「(「蘭書」の) 中には『明治 8 年文部省交付』『明治 9 年文部省交付』、あるいは明治 19 年、明治 21 年などの文部省交付印の併せ押捺したものの散見するところを見れば、上野図書館 (の前身=著者注) が明治 8 (1875) 年東京書籍館として再開した折、洋書の少ないことを憂えて、しばしば文部省に対して、洋書、特に科学書の備え付けを要求しているのに答えて、文部省が上記諸機関 (蕃書調所 (口絵 3) などを指す=筆者注) に収蔵されていたものを順次図書館に交付したものである。」

国会図書館所蔵の洋書に明治 8 年、9 年あるいは 19 年、21 年「文部省交付」印のあるものが多いのは確かである。しかしそれは昭和 28 年 (1953) に石山らが発見した「蘭書」とは別物である。(発見「蘭書」中の「文部省交付印」本は、部分的な調査だが、僅少と理解する。) 上記の『月報』記事は正しくない。この点を究明し、正解を導いたのも石山である。石山は上記『月報』記事から 10 余年後の昭和 49 (1974) 年に「国立国会図書館所蔵蘭書の来歴」<sup>10</sup> (『蘭学資料研究会報告』279 号所収) を著し、次のように説いている。以下、引用する。

<sup>9</sup> 「当館所蔵特殊コレクション紹介 (13) 江戸幕府旧蔵蘭学資料」『国立国会図書館月報』22, 1963, p.31.

<sup>10</sup> 『蘭学資料研究会報告』279, 1974, pp.45-53.

(国立国会図書館所蔵「蘭書」3,630冊の) 大多数は明治9(1876)年、東京大学からの移管による。『文部省年報』第3年報(明治8年)第1冊に収められた「東京書籍館年報」(明治9年3月提出)には「所蔵書籍類表」中に「荷蘭書」は51冊、懸図1枚の計52点であった。それが、翌年の第5年報(明治10年)第1冊の同年報(明治10年5月26日提出)では、3月8日廃止時の「所蔵書籍現数表」に「和蘭書6,547冊」となっている。この事情を示すのは同じ年の『東京大学法理文三学部年報』第5年報(明治10年)の「處務ノ事」中、次の記事である。「(明治九年)十月十六日本校開創以來所蔵ノ蘭書六千四百餘卷ヲ東京書籍館ニ送寄ス蘭書ハ本校ニ於テ不用ニ属スルヲ以テナリ」

引用した石山文中の荷蘭書、和蘭書は蘭書のこと、他に阿蘭書とも記された。明治9(1876)年の「東京書籍館明治九年報」<sup>11</sup>の現在総数分類表中に「和蘭書 6,547冊」とあり、「本年蒐集明細書」中の「和蘭書」の項に「文部省交付 16冊、開成学校交付 6,470冊、内外人納付 9冊」とある。東京開成学校(口絵35~37(組織名変遷を含む))は明治10(1877)年、東京大学と改称しており、「開成学校交付 6,470冊」は石山が記すところの東京大学からの移管蘭書である。言い直すと東京書籍館は明治9(1876)年3月時点で52冊の蘭書を所蔵していたが、同年に受けた交付・納付計6,495冊により蘭書は6,547冊となった。その大部分を占めるのが東京開成学校からの移管本6,470冊である。

上記の東京書籍館等の蘭書所蔵数並びに江戸幕府所蔵(旧蔵)蘭書に関わる主な組織変遷を表1に示した。

「蘭書」3,630冊の来歴は石山の一文によって初めて明らかになった。板沢武雄(蘭学研究者)からの示唆を得てのことと推察するが<sup>12</sup>、この点でも石山の功績は大きい。

<sup>11</sup> 『帝国図書館年報』国立国会図書館, 1974, pp.12-14.

<sup>12</sup> 板沢は『東京大学法理文三学部年報』第5年報(明治10年)の「蘭書六千四百餘卷ヲ東京書籍館ニ送寄ス」の件を承知していたと推察される。石山洋「蘭学資料研究会ことはじめ」『蘭学資料研究』付巻(龍溪書舎、1986年刊) p.26参照。

表1 国立国会図書館所蔵蘭書関連年表

和暦	西暦	国立国会図書館関連	江戸幕府蘭書所蔵機関関連	備考
安政3	1856		蕃書調所開設	
文久2	1862		洋書調所と改称	
文久3	1863		開成所と改称	
明治2	1869		大学南校と改称	
明治4	1871		南校と改称	7/18* 文部省設置。大学南校は7/21* 文部省所管となり改称
明治5	1872	8/1* 書籍館開館（湯島聖堂内）		
明治6	1873		開成学校と改称	
明治7	1874	8/13 浅草に移転し、「浅草文庫」と改称	東京開成学校と改称	
明治8	1875	4/8 東京書籍館と改称し湯島聖堂内に復帰		東京書籍館開館は5/17。旧蔵書は浅草文庫に残し、新たに文部省交付本によって再開
明治9	1876	51冊+懸図1枚（「東京書籍館年報」明治9年3月提出（『文部省第4年報』） 12/2 東京開成学校から蘭書6,470冊受入れ	10/16 東京書籍館に蘭書移管	懸図1枚のその後は不詳
明治10	1877	2/4 東京書籍館廃止 3/8 6,547冊 5/4 東京府所管の東京府書籍館として再開	東京大学と改称	
明治11	1878	東京府所管の蘭書62部114冊を蔵書に編入		
明治13	1880	7/1 再び文部省所管となり東京図書館と改称。6,558冊（『東京図書館明治13年報』）		
明治30	1897	4/27 帝国図書館発足		
明治39	1906	3/23 帝国図書館（現・国際子ども図書館）新築開館		
昭和23	1948	6/5 国立国会図書館開館（赤坂離宮内）、旧帝国図書館は傘下の支部上野図書館となる。		発足（＝館法公布）は2/9
昭和28	1953	石山らが支部上野図書館書庫にて「蘭書」発見		

\*旧暦（旧暦は明治5（1872）年12月2日まで。以後、新暦。）

### 3. 行方不明の「蘭書」

#### 3.1 問題の所在

国会図書館所蔵「蘭書」は少なくともその殆どが東京開成学校からの移管図書と判明したところで、次の問題が浮かび上がる。

「東京書籍館明治九年報」の「書目編次明細表」欄に「和蘭書未編入書 6,547 (冊)」と記載されている。未編入は未登録の意味であろう。それが発見された「蘭書」の起源だが、であれば6,547冊から昭和28(1953)年に発見された3,630冊を差し引いた2,917冊はどこへ行ったのだろうか。その行方が判然としない。

この点について桑原伸介(前述)は座談会「蘭学資料研究会発足の思い出」の中で、「6千何百冊あったという数字が、実際に昭和28年に発掘されたときには3,630冊しかなかったということでございますね。これまで問題にされる機会が無かったとおもいますが、これはひとつ記憶にとどめておく必要のある数字ではないかと思えます。」<sup>13</sup>と話している。

明治時代から「蘭書」発見の昭和28(1953)年までの間、同コレクションが粗末な環境に保管されてきたのは確かである。しかしコレクション(の一部)の他所への移管、被災、盗難、除籍等の記録は見当たらない。消失したのではないなら、残りの2,917冊は何処か。この点についても石山は検討しているようだし(後述)、桑原の指摘もある。しかし現在に至るまで、その所在は明らかになっていない。蘭書2,917冊は行方不明のままである。

#### 3.2 行方不明蘭書の探索

そこで行方不明蘭書の探索を始めるが、それに先立ち、次の2点を検討しておきたい。

1点目。言うまでもなく、蘭書はオランダの、またはオランダ語(蘭語)の書物のことである。あるいは、特に江戸時代にオランダから輸入された書物と言うのが、歴史的にはより適切かも知れない。

---

<sup>13</sup> 前掲注6, p.4.



い。けれども江戸時代、鎖国政策によりオランダが西洋への唯一のゲートウェイとなると、オランダは西洋と重なり、蘭書はしばしば洋書と同一視された。幕府の『重訂御書籍目録』中の「楓山文庫蔵蘭書目録」(天保2年)(楓山文庫：口絵2)は「蘭書目録」と呼称しつつ英書、仏書を含んでおり、こうした用法は明治時代に入っても続いた。明治5(1872)年に書籍館が創設されたが「開館当時の蔵書は12,916部で、冊数は不明であるが国書、漢書、蘭書にわたっている」<sup>14</sup>と記されている。洋書には蘭書が多かっただろうが、英書、仏書等も含んでいた。それらを書籍館は、洋書ではなく蘭書と一括している。

そこで東京開成学校から移管された蘭書であるが、その主体は蘭語図書だったろうが、蘭語以外の言語の洋書も混ざっていた。その点は朝倉・石山らも承知しており、それ故、最初の国会図書館所蔵蘭書目録を『江戸幕府旧蔵洋書目録』(蘭学資料研究会編。傍点筆者)とした。蘭書が蘭語以外の言語の洋書を含みうる点を念頭に置く必要がある。

2点目。東京開成学校移管蘭書は、江戸幕府旧蔵書に限らない点も押さえておく必要がある。「蘭書」には江戸幕府の蕃書調所、開成所等から大学南校、東京開成学校等へと引き継がれた洋書が多いが、同時に明治維新以降に収集された洋書も含まれる。それは明治維新以降刊行の洋書が『江戸幕府旧蔵洋書目録』『江戸幕府旧蔵蘭書総合目録』に散見されることで明白である。東京開成学校が東京書籍館に「不用図書」を移管した際、江戸幕府旧蔵洋書に明治維新以降収集の「不用洋書」を加えている。2,917冊の行方不明本を探索するには、この点にも留意が必要である。

上記に留意し、探索に取り掛かる。まず考えられるのは、1) 東京開成学校から移管後に目録整備され閲覧に供された蘭書(洋書)があったのではないか、2) 朝倉・石山が「蘭書」抽出の際、江戸幕府旧蔵図書としての識別が難しく、倉庫に残した蘭書(洋書)があったのではないか、の2点である。その点を以下、3.3と3.4で

---

<sup>14</sup> 『東京国立博物館百年史』東京国立博物館、1973、p.83.

考察する。

### 3.3 明治期の蘭書整理

明治9(1876)年に東京開成学校から蘭書が移管された際、大部分は未編入図書—即ち、受入れ未処理図書—とされた。しかし、新たに収集できる洋書の未だ少ない時期である。その時点で目録が作成され、閲覧に供された蘭書はなかつただろうか。

この点についても石山が丁寧な検証を行っている<sup>15</sup>。石山は東京府書籍館の文書中に館員の一人が蘭書整理に取り組んだ事実を究明した。が、同作業は明治10(1877)年12月から明治11(1878)年5月頃と長くはない。どれほどの蘭書が整理されたかわからない。またここで言う整理は閲覧に供するための目録作成ではなく、単なる受入れ(登録)事務だった可能性もある。

けれども、『帝国図書館年報』掲載の統計数字から以下を推測できる。「東京書籍館明治九年報」に閲覧に供しない「和蘭書 6,547冊」が記載されていることは先述した。その後、明治11(1878)年、東京府書籍館は旧幕引継書を受領したが、その中に62部114冊の蘭書が含まれていた。単純計で蘭書6,661冊。そして「東京図書館明治十三年報」蔵書統計中の「丙号」(重複本ほか閲覧に供しない資料)の項目では「和蘭」計6,558冊と記載された。明治9(1876)年から明治13(1880)年の間に他にも「和蘭」書の交付等があったかも知れないがそれを別にして計算すると6,661冊－6,558冊＝103冊。少なくとも100冊余が整理され、閲覧に供されたと推測できる。幾らかは未編入蘭書の整理が進んでいたことになる。

しかし移管された蘭書を「蘭書を主体とする洋書群」と解すると明治期の蘭書整理の見方が少し変わってくる。整理された蘭書は必ずしも蘭語図書ではなく、英書、仏書等だった可能性がある。そうした一書が次例で、同書は『江戸幕府旧蔵蘭書総合目録』p.33-34に記載されている。標題から同書は英書であり、請求記号

---

<sup>15</sup> 石山 前掲注10, pp.47-52.

により帝国図書館時代あるいはそれ以前に目録作成され閲覧に供された書と分かる。

Taylor, W.C., Pinnock's School Series. History of France and Normandy. 1860. 印記：大学南校（請求記号：91-188）

また『江戸幕府旧蔵蘭書総合目録』に記載はないが、上記と同類のものに以下がある。

Goldsmith, O., Pinnock's improved edition of Dr. Goldsmith's History of Greece. 1855. 印記：編輯寮、大学南校など（請求記号：91-179）

以上をまとめると、東京開成学校移管蘭書及び旧幕引継書中蘭書の一部は東京書籍館時代に整理され、閲覧に供された。ただそれらの大部分は英書、仏書で蘭語図書ではなさそうだ。明治期の整理区分別蔵書統計から類推すると、その数は、粗い推測だが 100 冊～200 冊程度であろうか。

なお、東京開成学校移管蘭書に旧幕引継書中の蘭書 114 冊（p.97 表 1 参照）を加えると行方不明蘭書は 3,000 冊余となるので、以下では行方不明本を 3,000 冊余とする。ただ、その大部分は東京開成学校移管分であり、それゆえ呼称は「東京開成学校移管図書」として書き進める。

### 3.4 抽出漏れ

閲覧に供しない上野図書館の乙部図書中から「蘭書」3,630 冊が発見されたが、蘭書でありながら抽出されなかった図書がある。つまり「抽出漏れ」である。英書、仏書、独書が多いようだが、なかに蘭書も見られる。それらは乙部洋書のその後の目録整備により現在は閲覧可能となっているが、「蘭書」コレクションに含められていない。

以下にその例を幾つか挙げる。

Bonnhoff, D., Nouveau Dictionnaire Français-Hollandais et Hollandais-Français. 1852. 印記：開成所、陸軍文庫（口絵 40）等（請求記号：Y995-B570）（なお同一本を請求記号：蘭-76 で所蔵。）

Eerste Beginselen Der Meetkunst en Driehoeksmeting. 1844, Rotterdam. 印記：長崎東衙官許（口絵28）（請求記号：Y995-B4980）

「抽出漏れ」図書について詳細な調査が必要である。他方、明治維新以降刊行の洋書を含めることの是非など、朝倉・石山が「蘭書」として抽出した基準の精査も必要だが、それについては4節で考察する。そうした精査と資料調査を待たずには数量的推測が難しいが、現時点ではその冊数100冊程度と仮置きして論を先に進めたい。

明治時代に整理され閲覧に供された蘭書、戦後間もなく整理された蘭書及び「抽出漏れ蘭書」が合わせて200冊～300冊程度ある。これらを調査・点検することが必要だが、とは言えその数は行方不明3,000冊余の一部を占めるに過ぎない。それらの事由では行方不明蘭書の全貌は明らかにならない。3,000冊余の大部分は、依然として行方が不明である。

### 3.5 未整理洋書の目録整備

では戦後、時を経て蘭書が目録整備された可能性はないか。

この点の調査は難しい。国会図書館蔵書のうち、明治9（1876）年一即ち、東京開成学校から東京書籍館に蘭書が移管された年一以前刊行の洋書蔵書数は、同館の「国立国会図書館検索・申込オンラインサービス」（以下、「国立国会図書館オンライン」）<sup>16</sup>で検索すると約2万点である。そこから幕府旧蔵書を1点、1点掘り出すのは、大湖に糸を垂れてすべての魚を釣り上げるに等しい。各冊、小当たりに実見調査してみたが、良い成果が得られない。

ただ、上記の実見調査を試すなかで、次の点に着目できることが分かった。

「国立国会図書館分類表」において「Y995」を付与された洋書は「別置措置洋資料（ここには、特に資料保存上別置を要するものを収める。）」である。その適用開始は平成19（2007）年6月である

---

<sup>16</sup> 2018年1月検索。

から、同記号・番号に分類された洋書の整備は、比較的、最近である。

同分類で刊年明治9（1876）年以前の図書を国立国会図書館オンラインで検索すると1,022件ヒットし、言語別に検索すると英語731件、仏語109件、独語60件、蘭語24件である。（その他はロシア語、イタリア語等の図書。）この件数は2万点よりずっと小さい。それで順に実見してみた。

まず気づくことは英語以外の洋書（仏語、独語、ロシア語の図書）が多いこと。そして中に既に記した「抽出漏れ」のほか、陸軍医療蔵書印、陸軍文庫印、沼津学校印、長崎東衛官許印などを付した図書が30数件（約40冊）見られる。以下はその事例である。

Aanhangsel op het algemeen woordenboek van kunsten en wetenschappen, 1840. 印記：長崎東衛官許、陸軍所、陸軍文庫、陸軍学寮文庫、沼津学校（沼津兵学校）（口絵41）（請求記号：Y995-B4984）

A Practical dictionary of English and German languages. 2v. 1870. 印記：陸軍医療蔵書、陸軍文庫（請求記号：Y995-B4859）

上記がすべて江戸幕府旧蔵蘭書（洋書）かどうかは不明である。しかし東京開成学校移管図書の一部である可能性は高い。

Y995分類の運用以前にも、未整理洋書（洋古書）の目録整備は、戦後、順次、進められてきた。そのなかに東京開成学校移管蘭書（洋書）が含まれていたことだろう。今世紀、Y995に分類された蘭書類は、その最後の未整理蘭書の目録整備ではなかったろうか。その全体冊数を知ることはできないが、全体の規模はさほど大きくなさそうである。

「抽出漏れ」分を含む明治以降整備蘭書類は、直近のY995分類蘭書等を含め、全体として数百冊程度と推察する。とても3,000冊には届かない。

#### 4. 探索（続）

行方不明蘭書の「謎」は解けず、探索は振り出しに戻ってしまった。そこで、スタートラインに立ち返って、別の視点、即ち「蘭書」コレクションの抽出は何を基準にしたか、から見てみよう。

## 4.1 印記を手がかりとした抽出

朝倉・石山が「蘭書」を抽出した際に手掛かりにしたのは、言語（蘭語で書かれた図書）及び検閲印を含む幕府諸機関等の印記と推察する。後者は蕃書調所、洋書調所（口絵 4）、開成所（口絵 5）等の蔵書印及び輸入洋書検閲の長崎奉行（口絵 28、34）、神奈川会所（口絵 29）の検閲印等である。それらは図書の旧蔵者及び幕府による輸入検閲を示すもので、幕府旧蔵の重要な根拠となる。

しかし幕府諸機関は、いつでも蘭書（洋書）に蔵書印などを押捺したであろうか。この点を考えて見よう。

そのため参考に、静岡県立中央図書館葵文庫中の洋書（蘭書等）を見てみる。幕府崩壊の折、徳川家の駿府移封が行われ、徳川家は多くの旧幕臣とともに駿府入りした。そのなかには、津田真道、中村正直、外山正一、名村元度、西周ら幕府開成所、外国方等勤務の蘭学者・洋学者も多数含まれた。彼らは新しい学問の拠点と目された駿府学問所（直ぐに静岡学問所と改称。以下、「静岡学問所」）及び沼津兵学校で教育に当たることになったが、そのために江戸城から多くの蘭書・洋書を携行した。それが静岡学問所及び沼津兵学校の蔵書となり、それら機関の閉鎖後、図書は大部分、静岡師範学校に移された。他方、幕末に幕府により横浜仏語伝習所が設けられた。同所も幕府瓦解により廃校となり、一部の所属学生と教科書等が静岡学問所、沼津兵学校に移された。その教科書等も各学校の蔵書となり、後に大部分が静岡師範学校に移された。

それらが大正 14（1925 年）年の静岡県立中央図書館の開設とともに同館に移管され、現在の葵文庫を構成している。葵文庫現蔵洋書数は 2,327 冊とされる<sup>17</sup>。

静岡県立中央図書館は同図書館葵文庫『江戸幕府旧蔵洋書目録』（1967 年刊）を編集・刊行しているが、各書の書誌事項に旧蔵者印記等を記載している。この書誌情報を素材として印記問題を検討してみる。

<sup>17</sup> 葵文庫蔵蘭書の一部（215 冊）は 1930 年（昭和 5 年）、東京大学、東京都外国語大学に寄贈された。石田德行「静岡県立中央図書館蔵 江戸幕府旧蔵書（所謂葵文庫）考」『地方史静岡』no.5, p.34. ほかにも拠る。

検討に当たり、まず次の作業を行った。1) 葵文庫は静岡学問所、静岡師範学校時代に新収したとみられている洋書を少なからず含む。それで明治維新以降刊行の図書を考察から除外した。2) 葵文庫『江戸幕府旧蔵洋書目録』で印記不明瞭を示す「？」を付した洋書が幾点かある。それらについては、現在、同資料群がデジタル化され県立中央図書館 HP 上で検索できる<sup>18</sup>ので、そのデジタル画像から筆者が判断し、補正した。次表に、印記の有無を言語別にタイトル数（件数）で示す。

表2 静岡県立中央図書館葵文庫洋書の言語別印記調査結果

	1 印記有り	2 検閲印のみ	3 印記無し	計
蘭語	244(86.5%)	24(8.5%)	14(5.0%)	282(100.0%)
英語	203(81.2%)	2(0.8%)	45(18.0%)	250(100.0%)
仏語	62(29.1%)	0(0.0%)	151(70.9%)	213(100.0%)
独語	9(90.0%)	0(0.0%)	1(10.0%)	10(100.0%)
その他の言語	15(78.9%)	0(0.0%)	4(21.1%)	19(100.0%)
計	533(68.9%)	26(3.4%)	215(27.8%)	774(100.0%)

表について説明を加えると、「駿府学校」「静岡学校」「沼津兵学校」の印記が付された図書も多いが、これらは明治維新後に付されたので除外した。そのうえで、「1 印記有り」は江戸時代の蕃書調所等の印記がある図書で、これらにはしばしば長崎東衛官許等の検閲印も付されている。「2 検閲印のみ」は蕃書調所等の印記がなく長崎東衛官許等の検閲印がある図書である。「3 印記無し」は蕃書調所等の蔵書印及び長崎東衛官許等の検閲印のどちらも無い図書である。

全体 774 件中、印記なしの図書が約 28% である。比重としては大きいと言えるだろう。ただ言語別に見ると、蘭語の「印記無し」は 5% で、それに比して英語は 18%、仏語は 71% と言語別で様相を異にする。葵文庫洋書中に仏書が多いこと、及びそれらの多くが印記を欠くのは、横浜仏語伝習所旧蔵書が多く含まれるためである

<sup>18</sup> 「葵文庫」(<http://www.toshokan.pref.shizuoka.jp/contents/library/index.html>)を参照のこと。

う。また刊行年でみると印記無しは、1850年代以降、とりわけ万延元（1860）年以降の書が多い。

上表では葵文庫『江戸幕府旧蔵洋書目録』中、刊年が明治元（1868）年以降のものは静岡学校、静岡師範学校時代収集の図書と考えられるので省いたことは先に記したが、加えて、維新以降に明治元（1868）年以前刊行洋書を収集した可能性も考慮しなければならない。英書、仏書の「印記なし」率の高さの一因はそこにもあるかも知れない。

とは言え特に英書、仏書などの場合、幕末期には「印記」を付与しなかった可能性がありそうだ。慶應元（1865）年設立の横浜仏語伝習所は、幕府機関であるにもかかわらず、同所の蔵書印を示す図書は葵文庫中で皆無である。

その点を仔細に見るために、次に幕末の洋書入手事情を考えてみる。

幕末の安政元（1854）年が日米和親条約、安政2（1855）年が日露和親条約、そして安政5（1858）年が日米通商条約の締結で、すぐにオランダ、ロシア、イギリス、フランスとの条約が続いた。万延元（1860）年2月には幕府は遣米使節を派遣するが、使節は米国で購入、寄贈等により英書約1,200冊を請来している。それ以降の遣外使節もその度に大量の洋書を日本にもたらした。それらは幕府により各所に配布され、その一部が葵文庫中に見られるが、そのほとんどに蕃書調所等の印記がある<sup>19</sup>。

しかし、その後はどうか。時期は幕末最終期になるが、慶応3（1867）年7月4日付けニューヨークタイムズ紙に記事「日本に送られるアメリカの教科書」が掲載された<sup>20</sup>内容を概略で示すと「最近わが国を訪れた日本の代表団はパトナム社に大量の教科書類を注文した。その第一弾としてパトナム社は13,000冊の学校教科書、1,000冊の自然科学、化学、地質学、生理学、天文学の書、2,500冊のウェブスター辞書等を日本に向けて出荷した。」膨大な

<sup>19</sup> 石原千里「万延元年遣米使節一行の将来本について」『英学史研究』14,1981, pp.185-215.

<sup>20</sup> 『新聞集成図書館』1,大空社,1992, p.410. に拠る。



量の洋書調達で、しかもそれが「第一弾」として、とされている。それに続く洋書調達も推測される。

これらは幕府内でどのように配布され、活用されたであろうか。従来の学問所・奉行所（開成所、天文方（口絵 19）、外国奉行等）だけでなく、より広範囲に配布されたのではないか。1860年代の後半は、それ以前に比すると書物の調達・配布事情が一変している。そして後者の場合、印記付与の慣例は変化したのでないか。それらが他書と一緒に選別されて駿府入りした。また別途、幕府内で集積されたものの多くは開成学校に継承され、その一部<sup>21</sup>が、第2節に記したように、明治9（1876）年、東京書籍館に移管されたと言うことではないか。

江戸幕府旧蔵洋書では、特に明治維新直前頃のものに印記無し図書が多い様子で、それは葵文庫蔵洋書に反映されている。かつ維新後収集の洋書にも一定数の印記（この場合の印記は大学南校など）無し図書を推察できる。とすれば、東京開成学校から移管の蘭書6千冊余には無印記の英書、仏書等（つまり蘭語以外の洋書）が相当数含まれていたと考えられる。当然だろうが、朝倉・石山がそれらを「蘭書」として抽出しなかった。

## 4.2 明治以降刊行洋書の印記有無

それに関連して、次の点にも留意が必要である。

既に記したように、朝倉・石山が「蘭書」として抽出した中に、明治維新以降刊行の洋書が一定数ある。それらは江戸幕府旧蔵書でないが、なぜそれらを抽出したか。その点を考察してみよう。

まず、その種の例として以下の2点を挙げる。

Alden, J., *Elements of Intellectual Philosophy*. 1869. 印記：大学南校（請求記号：蘭-3368）

Ganot, A., *Traité élémentaire de physique, expérimentable et*

---

<sup>21</sup> 東京書籍館への蘭書移管前に、明治5年、書籍館（明治7年に浅草文庫と改称）に数千冊の蘭書を移管している。安江明夫「浅草文庫旧蔵『蘭書』の行方—記録・史料による追跡」『アーカイブズ学研究』24, 2016, pp.30-43.を参照のこと。

appliqué. 1868. 印記：大学南校、東京開成学校（請求記号：蘭-3111）

上記からうかがえるのは、朝倉・石山は図書の言語、刊年も考慮しただろうが、より一層、印記（旧蔵者印等）を重視したらしいことである。それによって、江戸幕府旧蔵ではない維新以降収集の「大学南校」印などがある洋書も、「蘭書」として抽出した。とすれば、次のように考えることもできよう。

『東京大学法理文三学部年報』第5年報（明治10年）「處務ノ事」中に「（明治九年）十月十六日本校開創以來所藏ノ蘭書六千四百餘卷ヲ東京書籍館ニ送寄ス蘭書ハ本校ニ於テ不用ニ属スルヲ以テナリ」と記されていることは前述した。しかし、同文中の「蘭書六千四百餘卷」のなかには蘭語以外の洋書が含まれ、しかも上記 Alden、Ganot の著作が示すように、「本校開創」以降収集の洋書も含まれていた。それらには「大学南校」「東京開成学校」「陸軍文庫」等の印が付与されていたので、「蘭書」として抽出された。しかし同時に、蔵書印等が付与されない洋書も少なからず存在した。それらが蘭語以外の洋書で、しかも無印記なら、他に江戸幕府旧蔵の手がかりがない以上、朝倉・石山は「蘭書」として抽出しなかった。

東京開成学校から移管の蘭書に維新以降収集の洋書（英書、仏書など）が多く含まれていても不思議ではない。逆から言えば、国会図書館の行方不明図書約 3,000 冊に、明治維新以降受入れ（但し、東京開成学校蘭書移管年の明治9（1876）年以前）の無印記洋書が相当数、含まれていたと推測可能である。

朝倉・石山が上野図書館倉庫から「蘭書」を抽出したとき、彼らは東京開成学校移管蘭書と言う由来を知る由もなかった。しかし察すれば、同倉庫には東京開成学校移管蘭書 6,400 余巻がいわば「かたまり」、つまりは資料群をなして書架に配置されていたのではないだろうか。そこから 3,630 冊を抽出したとき、彼らはそれが如何なる資料群（の一部）か、と思慮することはなかったと思われる。

その後昭和 49（1974）年に石山が「蘭書」の由来を明らかにしたことは先述したが、それは「蘭書」発見後 20 年余のことである。

既に未整理洋書は上野図書館から、昭和 36（1961）年に新たに竣工した国会図書館永田町新庁舎（現在の東京本館）に移動させられており、「かたまり」としての東京開成学校移管蘭書の秩序（書架配置）はその時点では失われていたことだろう。同資料群を「かたまり」として物理的に再点検する機会は失われていた。

ここで、アーカイブズ学で言う「出所原則」「原秩序尊重の原則」の重要性を思い起こす。これは、出所を同じくする資料群のまとまりと秩序を重視し維持すること、必要であればそれを記録化する原則である。アーカイブズ資料のみならず、貴重書あるいは歴史的に重要な資料（群）の場合には、この「原秩序」に対する敬意と配慮が必要である。考古学の野外調査・発掘においては現場及び発掘作業の詳細な記録化が不可欠であるが、貴重書・歴史資料群に向き合う際にも、そうした「現状」の掌握と記録化が不可欠である。

この点、朝倉・石山の資料発掘においては、抽出「蘭書」の記録作成が欠けていた。昭和 20 年代当時としてはやむを得なかっただろうが、抽出した「蘭書」の倉庫内での様相、配置などについて、今や故人となった朝倉・石山に尋ねることができないのが残念である。

### 4.3 探索結果のまとめ

考察が少し煩さになったので、第 3 節、第 4 節で記した「行方不明蘭書」探索の結果を整理しておこう。

1) 蘭書は必ずしも蘭語図書を意味しない。3,000 冊余の行方不明蘭書について蘭語以外の英書、仏書等の洋書が多数含まれていて、これらが抽出の際に除外された可能性が高い。

2) 昭和 28（1953）年に乙部洋書から「蘭書」を抽出する際に、蘭語であっても抽出されなかった書がある。その正確な冊数は不明だが 100 冊程度と推測する。

3) 東京開成学校移管図書で明治時代に整理され、閲覧に供された英書、仏書等が一定数ある。これらは発見「蘭書」から、一部を除き、除外されている。これを含めて移管蘭書全体を考察する必要がある。

4) 戦後に順次、未整理洋書の目録整備が進められた。その中に

蘭書が含まれていた可能性が高い。最近の未整理洋書目録整備でも、東京開成学校移管蘭書の一部が Y995 に分類されている。

5) 1860 年代半ば以降の幕府収集洋書には「無印記」が相当あると推測できる。それらが蘭書以外の英書、仏書等の場合は、出所の識別が困難であったため、抽出されなかった可能性が高い。

6) 同様に、移管本には明治維新後収集本が相当数含まれていた可能性があるが、これらも「無印記」の場合、移管図書としての識別が不可能である。

以上を概括すると、行方不明の蘭書 3,000 冊余の一部は、蘭書あるいは幕府旧蔵洋書であるにも関わらず「抽出漏れ」したもの、及び、昭和 28 (1953) 年以前に目録整備されたものと考えられる。残りの大部分は、東京開成学校は「本校開創以來所藏ノ蘭書六千四百餘卷ヲ東京書籍館ニ送寄」と年報に記すが、蘭語以外の洋書一しかもその相当部分は明治に入ってからつまり「本校開創以來」に一収集された洋書だった。

明治 9 (1876) 年の東京開成学校からの移管後、他所への移管、廃棄、被災等による消失等の記録はない点を踏まえると、筆者は以下を想定する。即ち、東京開成学校移管蘭書は国会図書館蔵書中にすべて現存していると推察するのが妥当であり、閲覧に供してこなかった乙部洋書の比較的最近の整理により、現在では、それらすべてが閲覧に供されている。ただ、蔵書に混在のこれら洋書の大部分は、東京開成学校移管蘭書としての識別が困難である。

## 5. 結びにかえて

関東大震災、東京大空襲等に見舞われなかったことも幸いし、帝国図書館等の国会図書館前身時代の図書館は、江戸幕府旧蔵「蘭書」を保存することができた。長年、長期保存に適さない粗末な環境に置かれたが、戦後に発見され、特別の歴史資源として再認識された。貴重なコレクションとその発見の意義は大きい。

とは言え、国会図書館所蔵「蘭書」には、幾つか課題がある。それらを列挙して、結びにかえたい。

1) 現在、国会図書館で「蘭書」（「江戸幕府旧蔵洋書」）とされ

る約 3,600 冊には明治時代受入れ図書が含まれる。これらは「江戸幕府旧蔵洋書」ではありえず、「蘭書」から除外するか、あるいは少なくとも識別すべきであろう。これらの図書は刊年、印記等により、ある程度の精査が可能である。

2) 東京開成学校移管蘭書中の一定数の英書、仏書が、明治 10 年代に閲覧に供されるようになった。それらを調査し、印記・受入れ年月等により、江戸幕府旧蔵図書であると識別出来る図書を探索する必要がある。同様に、戦後に整理された乙部洋書で現在、「蘭書」に含まれない東京開成学校移管図書が相当数ある。それらを「蘭書」に付加する必要がある。

3) 国会図書館における蘭書の再定義が必要と考える。江戸幕府旧蔵蘭書とするか、または江戸時代輸入蘭書とするか、あるいはまた江戸時代輸入の英書、仏書をそれに含めるか。その定義を確立し、それに即した蘭書資料群の再構成が必要である。もし蘭書を江戸時代輸入蘭語図書とするなら、国会図書館は東京開成学校移管書以外にも、江戸時代に各所で活用された貴重な蘭書を所蔵しており、それを加える必要がある。

例えば、次書は江戸幕末の蘭方医として著名な「大槻俊齋寄贈本」である。

Lacuee, Jean Girard, “Gids voor den officier der infanterie in het veld”, Amsterdam, 1824. (請求記号: 167-74)「帝国図書館蔵」「明治 40.4.15 寄贈」印

また伊藤圭介は蕃書調所に勤めたこともある幕末・明治の著名な理学者だが、国会図書館現蔵の伊藤旧蔵書に次の蘭書がある。

Atlas van Europa in 16 kaarten. [18--?] (請求記号: 別-23)「帝国図書館」印 昭和 18.3.22 購入

上記 2 点は幕府旧蔵ではないが、江戸時代に重用された蘭書である。

また次のように、江戸時代に日本で復刻印刷され、活用された蘭書も少なからずある (一部は「蘭書」に含まれている)。

Pijl, Reiner van der, Van der pijl's gemeenzame leerwijs, voor degenen ,die de Engelsch taal beginnen te leeren. (安政 4

(1857)年に長崎で復刻印刷) 印記:長崎官事点検之印、安政丁巳(口絵31)(請求記号:183-284)。

上記のような蘭書を国会図書館の蘭書コレクションに含めるかどうかの検討が必要である。

蘭学資料研究会等の努力により、江戸時代の蘭学・洋学資料に関する理解は著しく発展した。とは言え、それは未だ発展途上である。その点は蘭書、蘭学を主題とする近年の諸研究<sup>22</sup>からもうかがい知ることができる。今一度、関係団体、関係者そして蘭書所蔵図書館等が協同し、蘭書コレクションの調査、目録整備などに取り組みられることを期待したい。

中でもとりわけ重視すべきは、江戸時代蘭書の総合目録データベースの構築であろう。『江戸幕府旧蔵蘭書総合目録』は優れた企てであったが、幕府以外の各藩、民間等で所蔵・利用された数多くの江戸時代蘭書は含まれていない<sup>23</sup>。より包括的な蘭書目録データベースの構築が必要とされる<sup>24</sup>。対象蘭書の一部は既に静岡県立図書館<sup>25</sup>やオランダ文献デジタル図書館計画<sup>26</sup>でデジタル化、ネット公開されており、それへのリンク付けも視野に置くべきである。こうした総合的な蘭書目録データベースの構築—その取組みと成果物—は、日本の蘭学・洋学研究に新たな息吹を吹き込むことになろう。

(やすえ あきお 洋学史学会会員／元国立国会図書館副館長)

<sup>22</sup> 「地域蘭学の総合的研究」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第116号、2004年)、松田清(研究代表)『蘭学基礎資料の調査・研究』(文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書)2006-2008年、高橋裕次(研究代表)『江戸幕府旧蔵資料の総合研究』(文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書)2008年、等。

<sup>23</sup> その試みに池田哲郎篇『日本見在蘭書目録(稿):江戸時代に輸入された幕府官本外の』蘭学資料研究会、1961.がある。

<sup>24</sup> 著者は2016年度洋学史学会シンポジウム(2016年5月開催)で「蘭書総合目録DB化の提案—蘭学研究の一層の発展のために—」と題する発表を行った。

<sup>25</sup> 前掲注18

<sup>26</sup> 同計画については下記サイト参照のこと。

digitale bibliotheek voor de Nederlandse letteren <http://www.dbnl.org/>

(印記・付箋等口絵掲載資料)

※【 】内は当館請求記号。

1. マーリン『蘭仏辞書』上 Pieter Marin, Groot nederduitsch en fransch woordenboek 2. druk., Te Dordrecht : by Joannes van Braam, Te Amsterdam : by Hermanus Uytwerf, A. Wor, en de Erven van G. Onder de Linden, 1730 【蘭-84】
2. 「楓山廻」同上【蘭-85】
3. 「蕃書調所」G.J.Stieltjes, G.A.Jacobi, Beschrijving van den tegenwoordigen toestand der veld-artillerien in Europa, in 's Gravenhage en te Amsterdam: Gebroeders van Cleef, 1842 - 1846 【蘭-436】
4. 「洋書調所」United States. Patent Office, Report of the Commissioner of Patents for the year 1856. Agriculture, Washington [D.C.]: C. Wendell, 1857 【蘭-3140】
5. 「開成所」Reglement op de exercitien en manoeuvres der infanterie, Ansei 4 [1857] 【蘭-647】
6. 「講武所文庫」Van Hoey Schilthouwer van Oostee, Beschrijving wegens het gieten van het metalen kanon, in 's rijks-geschutgieterij, te 's Hage, 's Gravenhage: A. Kloots en Comp, 1827 【蘭-952】
7. 「陸軍所」Aanhangsel op het algemeen woordenboek van kunsten en wetenschappen, S, Nymegen: J.F. Thieme, 1840 【Y995-B4984】
8. 「精得館」J. H. van den Broek, Handleiding der natuurkunde, ten gebruike bij het onderwijs aan 's Rijks Kweekschool voor Militaire Geneeskundigen, 2. druk, Utrecht: J.G. Broese, 1856-1859 【蘭-967】
9. 「開成館訳局」C. J. Hering, De kultuur en de bewerking van het suikerriet... benevens eene beschrijving van al de toestellen tot de suikerbereiding en tot het destilleren van rum, ten gebruike der planters in al de Nederlandsche overzeesche bezittingen, Rotterdam: H. Nijgh, 1858 【蘭-1103】
10. 「福山誠之館印」A. Meijer, G. F. G. Gobius, Handleiding tot de kennis der zee-artillerie, voor konstabels en matrozen-kanonniërs, 2. druk, Nieuwediep: J.C. De Buissonje, 1861 【蘭-958】
11. 「福山文庫」J. P. C. van Overstraten, O.H. Kuijck, Handleiding tot de kennis der artillerie, voor de kadetten van dat wapen, Breda : ter Drukkerij van Broese, voor rekening van de Koninklijke Militaire Akademie, 1850- 【蘭-957】
12. 「josiwo」Oude en nieuwe staat van 't Russische of

Moskovische Keizerryk, behelzende eene uitvoerige historie van Rusland en deszelfs Groot-Vorsten ... ,4-6. Boek, 't Utrecht: Johannes Broedelet,1744 【蘭-567】

13. 「**JOsivo**」 同上
14. 「**高島藏書**」 Netherlands.Departement van Oorlog, Reglement op de exercitiën en manoeuvres van de infanterie, voor de armee van Zijne Majesteit den koning der Nederlanden, 's Gravenhage [etc.] : Debroeders van Cleef 【蘭-415】
15. 杉田立卿書入れ William Sewel, A large dictionary, English and Dutch, in two parts : to which is added a grammar, for both languages = Groot woordenboek der engelsche en nederduytsche taalen, 4th ed., Amsterdam: J. ter Beek,1749 【蘭-74】
16. 「**求己文庫**」 項番1に同じ
17. 「**求己堂記**」 Jacob de Gelder, Algemeene aardrijksbeschrijving, Gevolgd naar den derden druk van NOËLS Fransche vertaaling van de algemeene aardrijksbeschrijving van Guthrij, Amsterdam: Johannes Allart,1803-1808 【蘭-275】
18. 高橋景保宛てシーボルトの献辞 James Hingston Tuckey, Aardrijkskunde voor zeevaart en koophandel / naar het Engelsch van James Hingston Tuckeys, Rotterdam: J. Immerzeel,1819 【蘭-269】
19. 丁巳天臺廻り (貼紙) 同上
20. 「**高橋藏書**」 [Atlas] 【蘭-323】
21. 「**TAKAHASHI**」 同上
22. 付箋 : 阮甫訳シハシメ Johann Hübner, Algemeene geographie, Amsteldam: P. Meijer,1769 【蘭-299】
23. 付箋 : 青地訳ノ始マリ 同上
24. 付箋 : 小関訳終于此 同上
25. 貼紙 項番12、13と同じ
26. 付箋 : 了 Noel Chomel, Algemeen huishoudelijk-, natuur-, zedekundig-, en konst- woordenboek, Leyden: Joh. le Mair,1778- 【蘭-65】
27. 貼紙 同上
28. 「**長崎東衙官許**」 E.H. Brouwer, Carl von Clausewitz, Over den oorlog, nagelaten werk door den generaal Karel von Clausewitz, uit het Hoogduitsch vertaald, Breda : ter Drukkerij van Broese & Comp., voor rekening van de Koninklijke Militaire Akademie,1846 【蘭-411】
29. 「**神奈川會所改**」 H. Picard, A new pocket dictionary of the English and Dutch languages, 2d ed., Zalt-Bommel: Joh. Noman,1857 【蘭-3595】



30. 「安政丙辰」 Reglement op de exercitien en manoeuvres der infanterie : uitgeg. op last van den koning der Nederlanden, Ansei 4 [1857] 【蘭-647】
31. 「安政丁巳」 Johannes Pieter Arend et al., Algemeene geschiedenis des vaderlands, van de vroegste tijden tot op heden, Amsterdam : J. F. Schleijs; [etc., etc.], 1840-1883 【蘭-353】
32. 「安政庚申」 J.A. Uilkens, Siegismund Friedrich Hermbstädt, Algemeene schets der technologie, of aanleiding tot eene wetenschappelijke kennis en beoordeeling van die kunsten, fabrieken, manufakturen en handwerken, welke met de landhuishouding en de staatkunde in de naauwste betrekking staan , ... Amsterdam : Gebroeders van Arum,1825 【蘭-517】
33. 「文久辛酉」 Joannes Henricus Arnoldus Weytingh, Beknopt geschied-, aardrijks- en fabelkundig woordenboek der classieke oudheid, benevens verklaring der meeste kunsttermen en andere benamingen, voor zoo ver zij van het Latijn of Grieksch zijn afgeleid, voor ongeletterden, Gouda: G.B. van Goor 【蘭-76】
34. 「長崎官事點檢之印」 項番30に同じ
35. 「東京開成所印」 S. F. La Croix, Beginselen der goniometrie en trigonometrie, vertaald door J. R. Schmidt, 4. druk, 's Gravenhage : Gebroeders van Cleef,1839 【蘭-2775】
36. 「大學南校」 Henry T. Tuckerman et al., A smaller history of English and American literature, New York,Harper,1869 【59-58】
37. 「南校圖書」 Henry Wells Holly, The art of saw-filing, 3rd ed, New York, John Wiley & Son,1866 【59-56】
38. 「舎密局」 J. H. van den Broek, Handleiding der natuurkunde, ten gebruike bij het onderwijs aan 's Rijks Kweekschool voor Militaire Geneeskundigen, 2. druk, Utrecht: J.G. Broese, 1856-1859 【蘭-967】
39. 「理學校印」 H. Birnbaum, Lucht en Wolken, mededeelingen over de natuurkunde van den dampkring en zijne verschijnselen, Leyden: A.W. Sythoff,1859 【蘭-903】
40. 「陸軍文庫」 Joseph Porter Wilson, A French and English dictionary, London: H.G. Bohn,1860 【蘭-748】
41. 「沼津學校」(沼津兵学校) 項番7に同じ

正誤表(平成 30 年 6 月 7 日現在)

頁	行等	修正前	修正後
94	19 行目	『蘭学資料研究会報告』…	『蘭学資料研究会研究報告』
	20 行目	第 316 号 (1977 年 3 月)	第 355 号 (1980 年 9 月)
	23 行目	昭和 59 (1984) 年	昭和 58 (1983) 年
	24 行目	2 (1990) 年	3 (1991) 年
95	28 行目	『蘭学資料研究会報告』…	『蘭学資料研究会研究報告』
	脚注 10	『蘭学資料研究会報告』 279,1974,pp.45-53	『蘭学資料研究会研究報告』 279,1974.2,pp.1-9
96	1 行目		(冒頭に挿入) 大多数は、明治 9 年、東京大学からの移管による。『文部省第四年報』に収められた「東京書籍館年報」(明治 9 年 3 月提出)には「所蔵書籍類表」中に「荷蘭書」は 51 冊、懸図 1 枚の計 52 点であった。それが、翌年の年報(明治 10 年 5 月 26 日提出)では、3 月 8 日廃止時の「所蔵書籍現数表」に「和蘭書 6547 冊となっている。この事情を示すのは同じ年の「東京大学法理文三学部年報」(明治 10 年 12 月提出)の「處務ノ事」中、次の記事である。「(明治九年十月十六日本校開創以來所蔵ノ蘭書六千四百餘冊ヲ東京書籍館ニ送寄ス蘭書ハ本校ニ於テ不用ニ属スルヲ以テナリ)」  年数の誤り等を補正すると以下の通りとなる。
	7 行目	籍現数数表」に…	(「数」を削除) 籍現数表」に…
97	表 1 明治 9	(『文部省第 4 年報』))	(『文部省年報』第 3 年報(明治 8 年)第 1 冊))